

ダンプ支部大会

七百年連続増勢達成



新しい役員、分会も紹介されました。



活動報告、運動方針を聞く参加した組合員

十一月十二日、佐野市「あくどプラザ」で第三十七回ダンプ支部定期大会を組合員七十一人の参加で開催しました。

工藤委員長はあいさつのなかで、「砕石業界では異常事態が続いている。工場で製品（石灰石二〇・〇五）を積むため連日長時間待機を強いられている」と製品の供給不足により稼働率が下がり減収と睡眠不足を強いられている実態を訴えました。今後オリンピック需要等により、一層このような状況が悪化することが予想されています。このような業界で担い手の育成など到底不可能です。

運動方針では、単価過積載問題など、いまこそ業界全体で取り組む必要が強調されました。

変化への対応を

そのためには、組合員を増やし組織を大きくすることが重要です。大会議案では、一〇

年間の組合員数の推移が報告されました。個人でダンプを所有する代車が減少するなかで、事業所単位での組織化を追求した結果、六年連続で組合員数は増えていきます。困難ではあっても、新体制でスタートします。

「フクシマ」の風化許すな 脱原発集會に結集

十一月十二日、宇都宮市城址公園で「さよなら原発集會」が開催され、ダンプ支部から十一人が参加しました。六月に開催された全国ダンプ交流集會の帰路、福島第一原発事故

変化に対応した取組みを追求することの重要性が強調されました。また、十一月から組合専従者になった内田秀行さんが紹介され決意を述べました。

首都高でのダンプ事故多発 事故原因の徹底調査を



の被災地を視察、参加した石川副委員長は「六年たっても復興していない。原発事故の深刻さを実感した。忘れてはいけない」と語り、宇都宮駅までパレードを行いました。

首都高でのダンプなど大型車事故が増えています。十一月二十一日午前四時ころ、中央環状線を走行中のダンプが側面に衝突し横転しました。ダンプは側壁を乗り越える形で停車し、積荷の土砂が下の一般道にまで散乱、運転していた五〇代のドライバーが亡くなりました。全国ダンプ部会では一〇月二十六日、東京オリンピック関連施設発注者である日本スポーツ振興センターにたいして、首都高を走る新国立競技場建設現場からの残土搬出ダンプの過積載や危険運行について、元請責任を指摘し調査を要請しています。いつ市民を巻き込む大惨事が起きてもおかしくありません。



集會には県内各地から1700人が参加。しかし事故の記憶が風化しつつある現実も。原発推進勢力は国民の「忘却力」に期待しています